研究発表「学年での動物飼育体験が子どもの動物への共感性および向社会的行動の発達に与える影響の検討」

中島由佳* 中川美穂子** 無藤 隆*** 吉本恒幸**** 池田日佐子***** 小林道正******

1 問題と目的

学校における動物の飼育活動は子どもの成長に良い影響を与えるとされ，その効果について，様々な事例が報告されてきた．しかし，学校で飼育活動をしない場合と比較して真に有用な効果が生じるのかについては，これまで実証的な検証がなされて来なかった．そこで本研究では，学年での動物飼育を１年間行った群と行わなかった群を比較することにより，学年での動物飼育体験が，子どもの動物への共感性および向社会的傾向の発達に与える影響について検討することを目的とした．

2 調査方法

(1) 調査対象者

[学年飼育あり群] 第４学年の総合の時間に位置づけた学年飼育を行っている東京都下の小学校７校の４年生467名（女子233名，男子234名）

[学年飼育なし群] 学年での飼育活動を取り入れていない東京都下の小学校５校の４年生328名（女子188名，男子140名）．

(2) 調査時期

Time １：学年飼育開始前である，平成17年３月（３年時の３学期末）

Time ２：学年飼育開始１年後である，平成18年３月（４年時の３学期末）

(3) 測度

「動物への共感性」：Ascione（1999）から，“走っている馬が倒れたら悲しく感じるだろう”，“犬は，夏に窓の閉まった暑い車の中にいるのはいやだろう”などの８項目を“全くそう思わない（１点）”から“とてもそう思う（４点）”までで測定．８項目の得点の合計を項目数で除した平均点を「動物への共感性」の指標とした．

「向社会的行動」：菊池など（1988）から，“電車などでお年寄りの話し相手になってあげる”，“友だちの宿題や練習を手伝ってあげる”などの10項目を“しない（１点）”から“きっとそうする（４点）”までで測定．10項目の得点の合計を項目数で除した平均点を「向社会的行動」の指標とした．

3 結果

(1) 動物への共感性

家庭での飼育経験のあり・なしにかかわらず，学年飼育前では，学年飼育なし群（1.56）とあり群（1.60）には有意な差が見られなかった（$F = 1.32$, $p = .25$）が，飼育１年後には，学年飼育あり群（1.66）がなし群（1.57）よりも有意に高かった（$F = 7.53$, $p = .006$）．［＊各群の後の数字は，平均値］

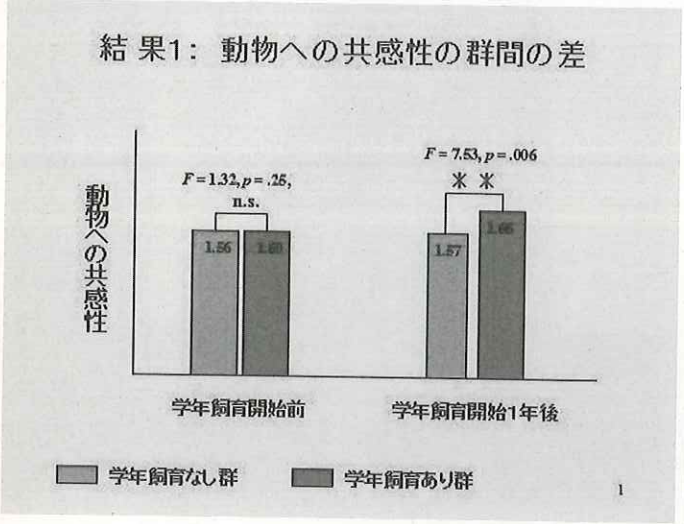
(2) 向社会的行動

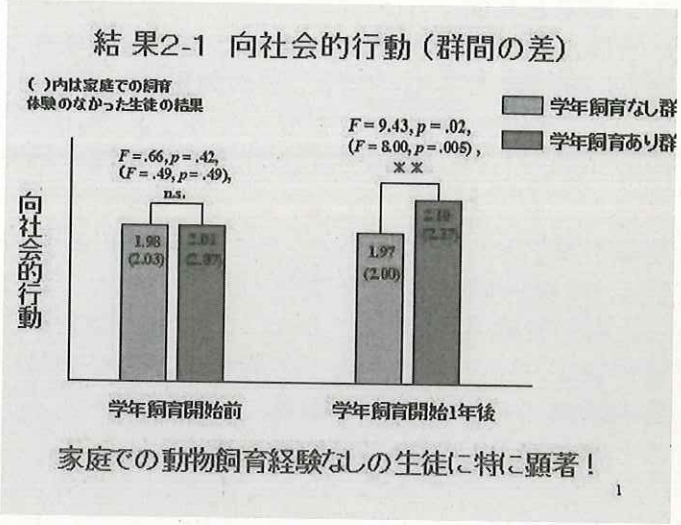
家庭での飼育経験のあり・なしにかかわらず，学年飼育前では，学年飼育なし群（1.98）とあり群（2.01）には有意な差が見られなかった（$F = .66$, $p = .42$）が，飼育１年後には，学年飼育あり群（2.10）がなし群（1.97）よりも有意に高かった（$F = 9.43$, $p = .002$）．また，家庭で動物の飼育経験のない生徒たちのみを対象に分析したところ，同様の傾向が見られた．学年飼育前では，学年飼育なし群（2.03）とあり群（2.07）には有意な差が見られなかった（$F = .49$, $p = .49$）が，飼育１年後には，学年飼育あり群（2.17）がなし群（2.00）よりも有意に高かった（$F = 8.00$ $p = .005$）．

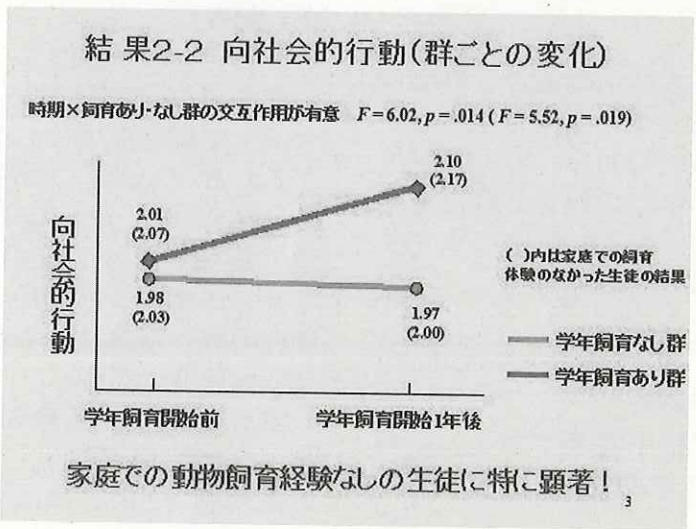
4 まとめ

学年での動物飼育を行っていた群は，行っていなかった群に比べ，飼育開始１年後において，動物への共感性も，他者へのおもいやり行動である向社会的行動も増加したことが明らかとな

った．これは，他者を思いやる心，行動が学年での動物飼育によって育まれることが実証されたと言える．学年飼育群では，飼育開始時に獣医師からの動物への接触指導を得て，動物への親しみ・関心を湧かせていることが，このような結果の重要点であろう．特に，家庭での動物飼育経験がなくとも，学年飼育によって，他者を思いやる心が成長することが明らかとなったのは意義深い．現在，学校での動物飼育は減少する傾向が見られるが，子どもの精神的な発達を促がす動物飼育の効果に留意すべきであろう．







【追加事項】

＜それぞれの小学校での飼育の条件と背景＞

対象地域には，平成３，４年から市と獣医師会の連繋があり，市立小学校の動物飼育に近くの動物病院の支援体制がある．

今回の調査協力校のうち，４学年生の飼育が無し群の小学校には飼育委員会（５，６年生）が飼育を行っているため．獣医師の支援は５，６年生の飼育委員のみを対象に行っているため，アンケート調査した４年生には獣医師は接触していない．

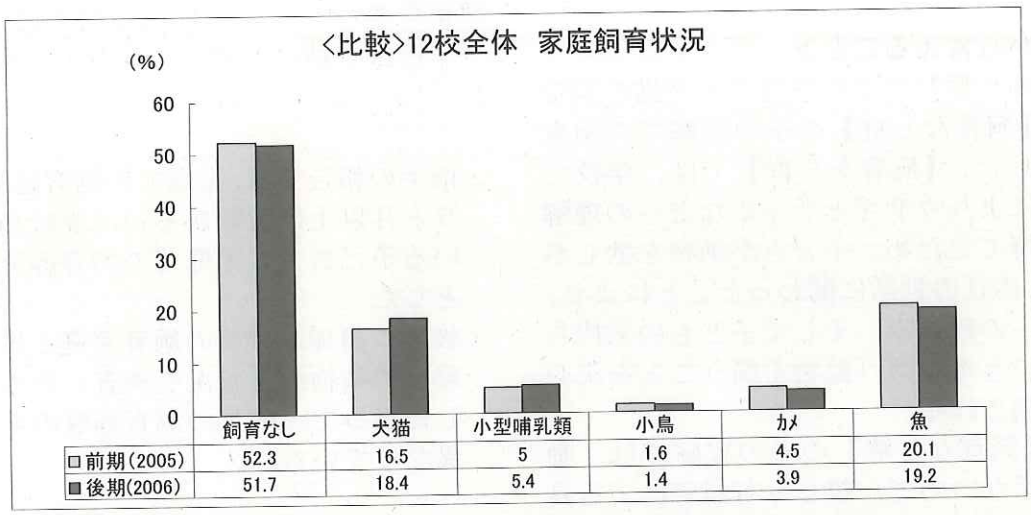
４学年生が飼育を行う小学校７校のうち，４校は飼育体験を「命の教育の基礎単元」として総合に位置づけている．前年度終わりの３年の時に，４年生が引き継ぎの集会を開催し，その後１ヶ月間は新４年生を新５年生が補佐して動物の世話を行うシステムができている．これらの学校には，春に獣医師が招かれ，子どもたちに，動物の気持ちを思いやるように説明して，子どもたちに動物を抱かせる接触体験を通じて関心と愛着を誘うための「飼育導入授業」を行っている．また，学校は保護者に教育方針を説明して，「命には休みがない」と子ども達につたえるために，休日には親子で世話を担当するシステムをとっている．

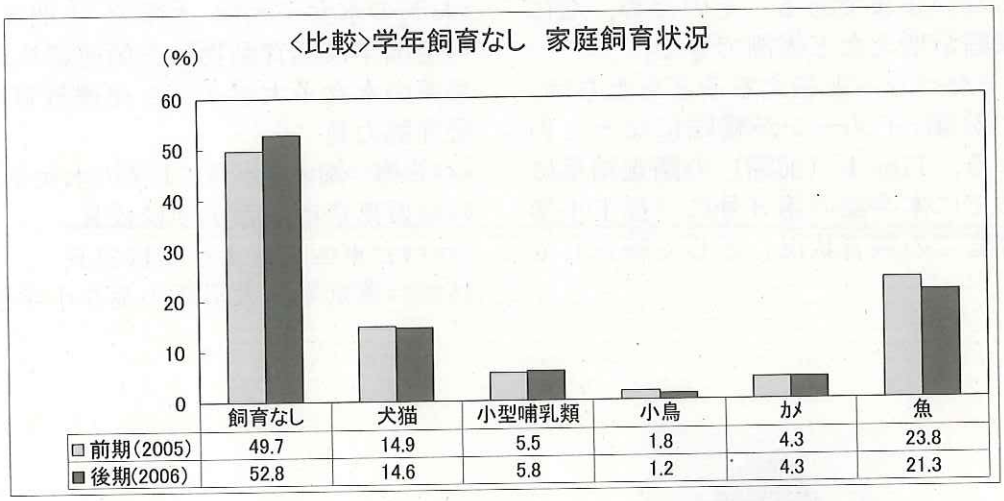
残る３校にも飼育学年への獣医師の支援体制があるが，特に総合に位置づけて教育に活用するまでは至っていない．中に１校，子どもたちが，動物にほとんど触わらず，チャボたちを怖がる学校も見られた．

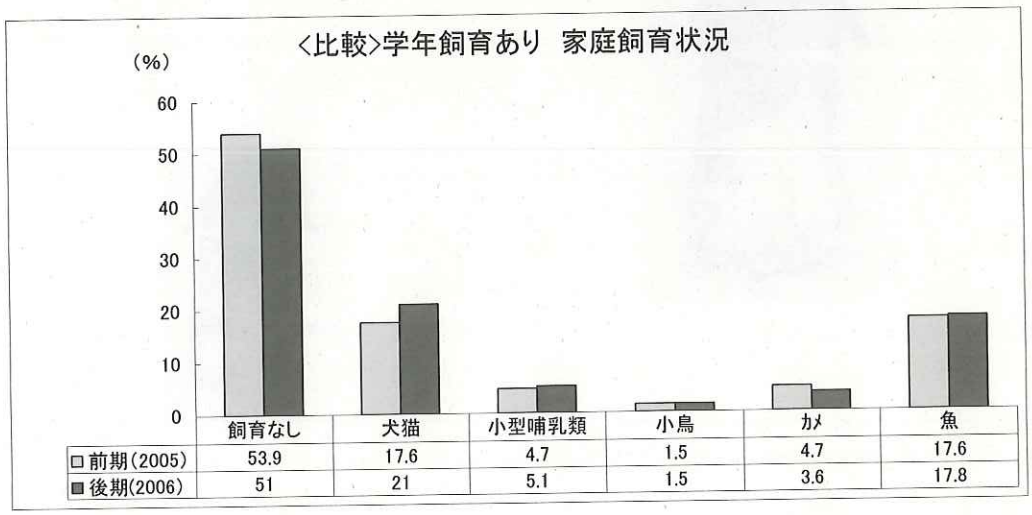
＜対象児童の家庭での動物飼育状況＞

基礎条件として，両群の子どもたちに，犬猫，小型ほ乳類，小鳥，亀，魚などの飼育状況について調査した．下の図は家庭での飼育状況を表しているが，感情を見て取れ，触ったり遊べたりして人と交流できる犬猫などの動物をより高次の動物と考え，複数種類を飼育している場合は，より高次の動物種に分類している．つまり犬猫を飼っている場合は，他のすべての種類も飼っている可能性があるが，魚に分類されている子は，魚しかいないことを顕している．

その結果，昆虫やカナヘビなどを除いて，これらの動物を飼っていない子が50％前後あった．前期の調査では，学校の飼育あり群と無し群には，殆ど差がみられないが，学年飼育あり群の１年後では，犬猫の飼育が増加していた．飼育無し群では，魚の飼育が元々高かったが，ペットを飼わない家庭が増えていた．







なお，これらのグラフで，「飼育なし」の５％以下には，子どもたちがペットとして，カブトムシと幼虫，クワガタ虫と幼虫・オサムシ，虫，ネズミ，ザリガニ，ヤドカリ，エビ，カニ，タニシ，ドジョウ，ヤモリ，トカゲ，マリモなどをあげていたが，いわゆる愛玩用のペットとは言えないため，飼育なしに分類した．なお，前期も同じ傾向であったがマリモをペットという子どもたちが複数みられていた．

＜飼育状況から言えること＞

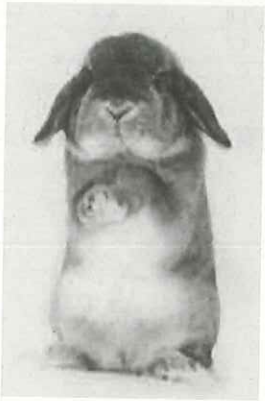
【学年飼育あり群】の子の家庭での犬猫の飼育がふえて，【飼育なし群】の子の家庭での飼育が減少していた．【飼育あり群】では，学校での動物飼育によりウサギとチャボなどへの理解と親しみが持てたため，子どもが動物を欲しがり，保護者も休日の世話に関わったことにより，自身の動物への親しみ，そして子どもの気持ちへの理解ができたため「動物を飼うことを決心した」と推測される．

同様に，【飼育なし群】の子の家庭では，動物との接点がないので，親しみも飼育による良い影響も知らないままである．そのため，なにも飼わない家庭が増えたと推測できる．

なお，マリモをペットと答える子どもたちは，動物と植物の分類・イメージが曖昧になっていると考えられる．Time１（前期）の調査結果については，すでに本会誌の第３号に「都下小学校３年生の家庭での飼育状況」として報告している．

＊家庭での飼育の検体数について

家庭での飼育状況について，現在飼育している子と，していない子．また動物種，それぞれの動物の飼育期間，自分が幾つのころ，それを飼育していたか，などを聞いている．前半の報告には，家庭での飼育経験について，動物の種類をほ乳類と愛玩鳥に限定しているが，これはこの種類が他の種類より，子どもにより多くの心的影響を与えていたとの中川の調査結果から，種類を選んでいる＊１．（中川美穂子　(2000)　学校飼育動物のすべて　中川美穂子編著　p24　ファームプレス）

・前半の報告では，家庭での飼育経験について，６ヶ月以上ほ乳類あるいは愛玩鳥を飼育している子どもを（家庭での飼育経験のある子）とした．
・後半の追加部分での飼育家庭とは，現時点の家庭で動物飼育状況を調査したものである．したがって，前半の飼育経験のある子の数と異なっている．

*お茶の水女子大学 大学院 人間文化研究科
**全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰／お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター研究協力員
***白梅学園大学学長／お茶の水女子大学教授
****西東京市向台小学校校長
*****台東区立富士小学校校長
******東京学芸大附属小金井小学校副校長